

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献 『デーンカルド』第3巻訳注・その1

青 木 健

序文

本稿の内容：本稿は、以下に述べるゾロアスター教書籍パフラヴィー語⁽¹⁾による文献『デーンカルド (Dēnkard)』第3巻の、転写と翻訳と注釈である。全9巻中の第3巻とはいえ、これだけで『デーンカルド』の現存写本の約半分を占める。とても1回ではその全訳注を掲載しきれないので、何回かに分けて『東洋文化研究所紀要』に連載する予定である。

また、責任者が、翻訳者と注釈者の2人、存在している。この間の事情については、以下に述べる「本稿成立の由来」を参照して頂ければ、経緯が明らかになる。責任の範囲を明確にしておく、第3巻全てに互って詳細な転写と翻訳の草稿を準備したのは、伊藤氏である。これに対して、その草稿を up to date なものにし、序文を草し、一切欠けていた注釈を補ったのが、青木である。ただ、2人で相談して最終稿を決定した訳ではなく、伊藤氏の訳業を没後に青木が継承したものである。従って、このような形で発表するに至った責任は、全て青木にある。

ゾロアスター教史上の『デーンカルド』：ゾロアスター教パフラヴィー語文献は、ペルシアでイスラームが優勢になりつつある社会状況のもとで、失われつつあったゾロアスター教の知識を記録に留める為に、9-10世紀の神官団によって執筆された⁽²⁾。ゾロアスター教では「文字は悪魔の発明」とされていた

為、サーサーン王朝時代（226–651）に至るまでの同教の文献は、『アヴェスター』⁽³⁾ 以外は殆ど残っていない。従って、このイスラーム教徒統治下の9–10世紀の段階で、紀元前1000年頃から継承されてきたと推測されるゾロアスター教の口承伝統が、一挙に文字化された訳である。

『デーンカルド』は、こうして執筆されたゾロアスター教パフラヴィー語文献の中で、最も大部な著作である。9世紀に大神官（Hudīnān Pēšōbay）のアードゥルファッローバイ・イー・ファッロフザーダーン（Ādurfarrōbay-ī Farroxzādān）⁽⁴⁾ が編集を開始し、10世紀にアードゥルバード・イー・エーメーダーン（Ādurbād-ī Ēmēdān）⁽⁵⁾ が完成させた。およそ100年に亘って、歴代神官が書き継いだことになる。

それだけに、『デーンカルド』には綿密な構成は認められず、『ゾロアスター教の百科全書』的な存在である。それでも、一応、全9巻をおおまかに3つの部分に区分されて理解される。①第3巻から第5巻までは、ゾロアスター教上の神学的主題に関して、箇条書きで弁明を試みている。②第6巻は、サーサーン王朝時代のイランの鏡文学を集大成している。③第7巻から第9巻までは、『ザンド』⁽⁶⁾ の内容に基づいて、ゾロアスターの生涯や「ガーサー」の内容を紹介している。

以上の紹介から、以下のような『デーンカルド』研究の問題点が浮かび上がってくる。

1. 『デーンカルド』の内容の年代特定の困難。即ち、或る内容は、紀元前1000年当時に教祖白らが語った言葉を反映させているかも知れず、或る内容は、紀元後1000年頃にイスラーム教徒に包囲されたゾロアスター教徒の状況を反映しているかも知れない⁽⁷⁾。特に、雑多な内容が盛り込まれた第3巻は、各箇条の年代特定が殆ど出来ない。
2. 『アヴェスター』の影響を特定する困難。執筆した神官団の理念の上では、『デーンカルド』は『アヴェスター』に即してゾロアスター教の教

義を説明する著作である。従って、『アヴェスター』に伝承されていたとされる内容が、自明のこととして語られる。しかし、そんなことは我々にとっては自明ではないし、実際にそのような『アヴェスター』が存在した保証もない⁽⁸⁾。

3. 過去2000年間に互って執筆活動とは無縁だったゾロアスター教神官団が、必要に迫られて止む無く書き留めた著作が、パフラヴィー語文献である。その為、文章はぎこちなく、動詞や主語の省略は頻繁である。また、ゾロアスター教パフラヴィー文字の曖昧性が、これに輪を掛けている。純粹に語学上の理由からだけでも、これらの文献を正確に翻訳するのは頗る困難である。

『デーンカルド』の写本：比較的完全な『デーンカルド』の写本は、1つしかない。1659年に書写され、現在ムンバイのカーマ東洋研究所に保管されている Bombay 写本である。この写本の基になった原本は、1020年にバグダードで作成されたと考えられている。

この Bombay 写本は、以下の2回校訂されている。

- Sanjana, Peshutan and Darab (eds. and trs.) [1874-1919]: *The Dinkard: Books 3-9*, 19 vols., Bombay.
- Madan, Dhanjishah Meherjibjai (ed.) [1911]: *The Complete Text of the Pahlavi Dinkard, Vol. I: Book III-V, Vol. 2: Book VI-IX*, Bombay.

また、後には、この写本に散逸した若干のフォリオを加えたファクシミリ版が、出版されている。但し、このファクシミリ版は、上述の Madan 版の正確さを再確認するにとどまっている。

- Dresden, M. J. (ed.) [1966]: *Dēnkard: A Pahlavi Text, Facsimile edition of the manuscript B of the K. R. Cama Oriental Institute Bombay*, Wiesbaden.

本稿では、基本的に Madan 版に依拠しつつ、そのページ番号ごとに訳注を

展開してゆくことにする。

『デーンカルド』全9巻の内容：以下、Madan版のページ数を示しつつ、
『デーンカルド』全9巻の概略を掲げたい⁽⁹⁾。

第1巻：lost

第2巻：lost

第3巻 (pp. 1-407)：邪教徒（マーニー教徒、キリスト教徒、イスラーム教徒）に対するゾロアスター教の護教神学。第1章～第420章。

第4巻 (pp. 409-431)：前半はゾロアスター教の創造の流出論的解釈。後半はゾロアスター教とペルシア王権との関係の解説。

第5巻 (pp. 433-470)：前半は、ダイラム人 Ya'qūb ibn Khālid の質問に対する Ādurfarrōbay の解答集で、ゾロアスター教の教義とザルドシュト伝説を扱う。後半は、キリスト教徒 Bōxt Mārā の33の質問に対する芥明で、二元論や『アヴェスター』の内容を扱う。

第6巻 (pp. 473-590)：ペルシア伝統の倫理忠告集。『アヴェスター』の Baris Nask からの抜粋とされる。

第7巻 (pp. 591-676)：ザルドシュトその他のゾロアスター教の預言者伝説を扱う。『アヴェスター』の Spand Nask からの抜粋とされる。

第8巻 (pp. 677-786)：サーサーン王朝時代の『アヴェスター』全21巻の要約。①ガーサー関係の7巻、②祭祀関係の7巻、③法律関係の7巻の要約から構成される。

第9巻 (pp. 787-953)：『アヴェスター』中のガーサー関係の注釈。Sūtkar Nask、Varštmānsar Nask、Bag Nask の3巻からの抜粋とされる。

本稿では、『デーンカルド』第3巻から、欠損の激しい第1章～第5章を除き、第6章～第9章を、Madan版のページ数に換算して p. 7, l. 17-p. 11, l. 3 の間、訳出することにした。この第6章～第9章は、異教徒からゾロアスター教神官への質問とその答えである。

翻字 (Transliteration)・転写 (Transcription)・翻訳 (Translation)・注釈 (Commentary)：ゾロアスター教パフラヴィー語文献は、一文字多音で、極めて曖昧な子音文字のみによって構成されている。従って、その解読に際しては、写本の各文字をどう判読したかを「翻字 (transliteration)」で示し、更に、その各文字の組み合わせをどう単語として再建したかを「転写 (transcription)」で表示しなければならない。その転写形をもとに、最終的な意味の解釈としての「翻訳 (translation)」がなされる訳である。

この為、理想を言えば、翻字／転写／翻訳を一括して示すに越したことはない。ただ、この作業過程を全て誌面に収めたら、膨大な量になってしまう。そこで、本稿では以下のような解決策をとった。即ち、翻字から転写形を再建する場合、幾つもの可能性を考慮しなくてはならず、かなりの考証を必要とする。しかし、逆に、転写形を示せば、その原型となった翻字を想定することは、少なくともイラン学者には容易である。また、以下に述べるように、本稿は Madan 版テキストと精密に対応するように構成されているので、翻字まで必要な場合はテキストを参照して頂ければ良い。この為、本稿では、敢えて転写と翻訳だけを示し、翻字は割愛することにした。

また、「注釈 (commentary)」に際しては、言語学上・宗教学上の2種類に分けた。即ち、ゾロアスター教書籍パフラヴィー語を理解する上での言語学上の問題は、転写の注釈で扱い、ゾロアスター教を理解する上での宗教学上の問題は、翻訳の注釈で扱った。

本稿の構成：本稿は、Madan 版テキストのページ番号に従って⁽¹⁰⁾、「第〇ページの転写」→「第〇ページの翻訳」→「第〇+1ページの転写」→「第〇+1ページの翻訳」の順で展開している。各ページの転写と翻訳を交互に参照できるように、工夫した積もりである。更に、転写の各行が、対応する翻訳の各行に、正確に照応するように構成されている。これによって、各行をどう転写し、それをどう翻訳したかが、明瞭になっている筈である。その分、余分な

空欄を生じ、通読するには不便になっているかも知れないけれど、学問的な価値は増している。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語は、曖昧なパフラヴィー文字をどう読み解くかによって、かなり解釈が変わってくる。この為、翻訳だけではほとんど意味をなさない。翻訳と正確に対応する転写形の明示が、絶対に必要である。本稿では、この必要を満たす為に、敢えてこのような複雑な構成をとることになった。

参考文献：先ず、『デーンカルド』第3巻の翻訳・部分訳を含む研究書を挙げる。

- Bailey, H. W. [1943]: *Zoroastrian Problems in the Ninth-Century Books*, Oxford.
- Menasce, J. P. de [1958]: *Une encyclopédie mazdéenne: le Dēnkart*, Paris.
- — [1973]: *Le troisième livre du Dēnkart*, Travaux de l'Institut d'Études Iraniennes 5, Paris.
- Mole, M. [1963]: *Culte, mythe et cosmologie dans l'Iran ancien*, Paris.
- — [1967]: *La légende de Zoroastre selon les textes pehlevi*, Travaux de l'Institut d'Études Iraniennes 3, Paris.
- Sanjana, Peshutan and Darab (eds. and trs.) [1874-1919]: *The Dinkard: Books 3-9*, 19 vols., Bombay.
- Shaked, S. [1969]: "Esoteric Trends in Zoroastrianism," *The Israel Academy of Sciences and Humanities Proceedings* 3/7, pp. 175-221.
- — [1979]: *The Wisdom of the Sasanian Sages (Denkard VI) by Âturpât-i Êmêtân*, Persian Heritage Series 34, Boulder, Colo.
- — [1994]: *Dualism in Transformation*, School of Oriental and African Studies.

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その1

- Shaki, M. [1970]: “Some Basic Tenets of the Eclectic Metaphysics of the Dēnkart,” *Archív Orientální* 38, pp. 277-312.
- — [1973]: “A Few Philosophical and Cosmogonical Chapters of the Dēnkart,” *Archív Orientální* 41, pp. 133-164.
- — [1981]: “The Dēnkard Account of the History of the Zoroastrian Scriptures,” *Archív Orientální* 49, pp. 114-125.
- Zaehner, R. C. [1955]: *Zurvan: A Zoroastrian Dilemma*, Oxford.
- — [1956]: *The teachings of the Magi*, London.
- 伊藤義教 [2001]: 『ゾロアスター教論集』、東京。

これ以外では、以下の研究書を頻用した。

- Amouzgar, J. and A. Tafazzoli [2000]: *Le cinquième livre du Denkard*, Paris. …本書は『デーンカルド』第5巻のフランス語訳であって、直接第3巻に関わる翻訳は含まれていない。しかし、2000年の時点までの『デーンカルド』研究に関する情報を網羅的に含んでいる点で重要である。
- ‘Oryān, Sa’id [1377A. H. (西暦1999年)]: *Vāzhenāme-ye Pahlavī-Pāzand: (Farhang-e Pahlavī)*, Tehrān. …本書は、出版時点までに欧米の研究書で言及されたパフラヴィー語・パーザンド語の語彙を集大成した辞書である。1971年に D. N. MacKenzie が *A Concise Pahlavi Dictionary* を出版して以降の動向を俯瞰する為には、便利である。
- Ōshīdarī, Jahāngīrī [1999]: *Dāneshnāme-ye Mazdayasnā: Vāzhenāme-ye Touzihī-ye Ā’in-e Zartosht*, Tehrān. …本書は、イラン系ゾロアスター教のモーベド階級出身の著者が、ゾロアスター教に纏わる基本的用語を解説した百科事典である。欧文や和文では類書がないだけに、重宝する。
- Stausberg, Michael [2002]: *Die Religion Zarathushtras: Band 1 Geschichte*, Kohlhammer. …本書は、現時点で最新のゾロアスター教通史。M. Boyce のゾロアスター教史が著者独自の史観に基づいて同教を再

構成するのに対し、本書は専ら詳細なゾロアスター教研究史を追うことに目的がある。主要な翻訳・研究書・論文は、同書で確認できる。

- ・伊藤義教 [1967]: 「アヴェスター」、辻直四郎（編）『ヴェーダ アヴェスター』、筑摩書房。…本書は、伊藤氏による『アヴェスター』抄訳である。W. Hinz, H. S. Nyberg に大きく影響された古風な翻訳となっている。
- ・ー [1979]: 『ゾロアスター研究』、東京。…本書は、伊藤義教氏による『デーンカルド』第7巻と第5巻の前半の翻訳。本稿にとって基礎になる情報を多く含む。

上記以外の参考書については、注釈の中で必要に応じて挙げているので、そちらを参照して頂きたい。

本稿成立の由来：本稿は、複雑な経過を経て成立している。本来、この『デーンカルド』第3巻の全訳を準備していたのは、故・伊藤義教氏（1909-1996、元・京都大学文学部教授）だった。しかし、本稿の草稿が完成した時、既に氏は83歳で、全文を校訂して印刷に付す余力が残されていなかった。草稿の最終ページに記された日付（1992年7月21日）が、それを明瞭に物語っている。

伊藤氏の死後、この草稿は長らく氏の書斎に眠り、顧みられることはなかった。しかし、2002年3月に、青木が、伊藤氏の晩年の弟子である永ノ尾氏と共に、伊藤氏の書斎に立ち入る機会を得て、そこでこの草稿を発見した。その後、青木が、伊藤氏の未亡人、恵美子夫人から氏の遺稿を寄贈して頂き⁽¹⁾、これを校訂して出版する許可を得た。そして、青木が先学の遺稿に手を入れて完成したのが、本稿である。

なお、伊藤氏のノートから転写と翻訳を起し、PCに入力する作業については、東洋文庫臨時職員の深見和子さんのお世話になった。記して感謝したい。

略号：本稿では、本文の転写に際して、以下の略号を使用する。+=語頭に付して改読・改訂を示す、*=語頭に付して推定再建形を示す。

また、翻訳に際しては、以下の略号を使用する。〈 〉=誤脱の復元、〔 〕

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーナカルド』第3巻訳注・その1

＝削除すべき項目、《 》＝原文で既に注と見なすべき部分、()＝訳者による補筆。

更に、注釈に際しては、以下の略号を用いた。Av. =アヴェスター語、MP. =パフラヴィー語（中世ペルシア語）、NP. =近世ペルシア語。

1 「ゾロアスター教書籍パフラヴィー語」とは、中世イラン語の一種で、西南方言のペルシア語に属する。別名が中世ペルシア語。この時期の文献は宗教ごとに文字が違うので、敢えて「マーニー教中世ペルシア語」とか「ゾロアスター教パフラヴィー語（中世ペルシア語）」と、宗教の名称を冠して呼んでいる。更に、ゾロアスター教徒の場合は碑文と書籍で文字を違えていたので、煩雑なのだが、ゾロアスター教徒が書籍に書いた中世ペルシア語を「ゾロアスター教書籍パフラヴィー語」と称している。

2 ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献に関する最新の概説としては、Stausberg [2002: 291-97] “Die Kodifikation der religiösen Überlieferung: Die religiöse Pahlavi-Literatur der Zarathuštrier (9.-10. Jahrhundert u. Z.),” 参照。パフラヴィー語文献の分類としては、C. G. Cereti, “Problemi di genere e classificazione nella letteratura pahlavica,” *Atti del Sodalizio Glottologico Milanese*, 37, 1996, 296-307 も参照。

尚、上記の情報に漏れた新発見のパフラヴィー語文献として、以下のものがある。2004年のラヴェンナでのイラン学会に於けるアーザルパーイの報告に拠れば、2001-02年にカリフォルニア大学が購入したパフラヴィー語公文書の中には、約260点に及ぶ絹・羊皮パフラヴィー語文書が含まれている。Ph. Gignoux によると、7-8世紀の経済文書であるとのこと。全てが解読・研究されたら、ポスト・サーサーン王朝時代のイラン社会史が書き換えられるだろう。詳しくは、以下の会議の Abstract を参照。

http://www.societasiranologicaeu.org/Sito%20Conferenza/pdf/abstract/wednesday/mi_yakujosepazarp.pdf 因みに、この情報は、ラヴェンナの会議に出席された春田晴郎氏（東海大学）による。記して感謝したい。

3 ここで言及する『アヴェスター』とは、サーサーン王朝時代後期に最終的に確定され、アヴェスター文字によって筆写された『サーサーン王朝版欽定アヴェスター』である。サーサーン王朝以前に存在したであろう複数系統の『アヴェスター』伝承

を包括的に扱った研究としては、K. Hoffmann und J. Narten, *Der sasanidische Archetypus*, Wiesbaden, 1989参照。また、近年の『アヴェスター』研究史としては、Jean Kellens, “L’avestique de 1972 à 1990,” *Kratylos: kritisches Berichts- und Rezensionorgan für indogermanische und allgemeine Sprachwissenschaft*, Jahrgang 36, 1991, 1-31参照。

現存『アヴェスター』中にはスィースターン方言や古代ペルシア語の影響が看取されることから、『アヴェスター』口承はハカーマニシュ王朝時代にスィースターンからパールスへ流入し、その後には拡散したと考えられている。サーサーン王朝時代に至るまで、複数の地方的口承が共存していたのであろう。

4 最初に筆を起こしたアードゥルフアッローバイ・イー・ファッロフザーダーンは、カリフ・マムーンの御前で背教者「呪われた Abālish」と討論し、また、書簡集 Rivāyat を多数執筆するなど、かなりの事績で知られている。但し、息子で大神官職を継いだ Zardušt は背教して、父の著作を一端廃棄したと伝えられている。A. Tafazzolī, “Ādurfarnbag ī Farroxzādān,” *Encyclopaedia Iranica*, Vol. I, 477-478 参照。

5 彼の名称は、『デーンカルド』第3巻の末尾に (Madan 版 p. 406)、第3巻の編集者として触れられているだけである。息子のエスファンディヤール (Esfandiyār) が、936年にアッバース王朝のカリフ・ラーディーによって処刑されているので、10世紀前半に生存したと思われる。A. Tafazzolī, “Ādurbād ī Ēmēdān,” *Encyclopaedia Iranica*, Vol. I, 477参照。

6 『ザンド』に関する総説としては、Jehangir C. Tavadia, *Die mittelpersische Sprache und Literatur der Zarathustrier*, Leipzig, 1956, 38-44参照。新発見の『ザンド』断簡に関しては、Gert Klingenschmitt, “Neue Avesta-Fragmente (FrA.),” *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*, Heft 29, 1971, 111-175参照。『アヴェスター』解釈に於ける『ザンド』の位置付けに関しては、Gert Klingenschmitt, “Der Beitrag der Pahlavi-Literatur zur Interpretation des Avesta,” *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*, Heft 37, 1978, 93-107参照。また、最近の研究としては、Judith Josephson, *The Pahlavi Translation Technique as Illustrated by Hōm Yašt*, Uppsala, 1997参照。

尚、最後に挙げたスウェーデンの『ザンド』研究者ジョゼフソンは、「ソグド語、ギリシア語、バルティア語のザンドも存在しただろう。」としているが、甚だ疑問である。Judith Josephson, “Remarks on the Pahlavi Version of the Gāthās,” *Studia Iranica*, 32, 2003, 8-9参照。ソグド語については、マーニー教徒によって書

き取られた聖呪「アシェム・ウォフー」のソグド語訛音が存在しているので、イランとは別系統の中央アジア版『アヴェスター』口承を想定することは可能である。M. Boyce and F. Grenet, *A History of Zoroastrianism*, Vol. 3, Leiden/New York, 1991, 124参照。バルティア語については、確かにバルティア時代には複数の系統の『アヴェスター』口承が存在したかも知れない。A. Hinze, “The Avestan in the Parthian Period,” *Das Partherreich und seine Zeugnisse*, Stuttgart, 1998, 147-161参照。しかし、そこから複数の文字化された『ザンド』の存在を導くには無理がある。

これらとは別に、大神官キルデルによるナクシェ・ラジャブ碑文とサル・マシュハド碑文中の「冥界旅行記」が、「ウィーデーウダード」第19章と酷似していることから、この碑文を初期『ザンド』の一形態と見做す立論もある。P. O. Skjarvø, “Kirdir’s Vision: Translation and Analysis,” *Archaeologische Mitteilungen aus Iran*, 16, 1983, 269-306参照。同説が認められるとしたら、これが碑文パフラヴィー語による最古の『ザンド』である。

また、『ザンド』の起源に関しては、ハカーマニシュ王朝第4代王クシャヤールシャン1世(r. 前486-前465)のベルセポリス碑文h(思想研究上は「ダイウ禁止碑文」として有名)の第47-48行と、「ウィーデーウダード」第5章61節との対応関係も問題になる。J. Kellens, “Sur un parallèle inverse à l’inscription des ‘daiva’,” *Studi e Materiali di Storia della Religioni*, 40, Roma, 1969, 209-213参照。ほんの部分的でしかも表現上は逆転している一致なのだが、意味するところは同じである。これを、クシャヤールシャン1世が先行する「ウィーデーウダード」を古代ペルシア語訳させた想定すれば、この古代ペルシア語碑文を『ザンド』の嚆矢と見做せる。ただ、偶然にイラン民族共通の宗教観念が表明されていた可能性も高い。

なお、『ザンド』のパフラヴィー語は、『デーナカルド』などの「書籍パフラヴィー語」とは違い、「古期パフラヴィー語」と言われる。N. Alberto Cantera Glera, “Die Stellung der Sprache der Pahlavi-Übersetzung des Avesta innerhalb des Mittelpersischen,” *Studia Iranica*, 28, 1999, 173-204参照。この「古期パフラヴィー語」の文法上の特色は、①「書籍パフラヴィー語」では3人称単数と複数にしが残存していない叙想法(subjunctive)を、全ての人称に互って保持していること、②1人称単数の代名詞、親族名詞などで、直格と斜格の区別を保っていること、である。

- 7 現在までのゾロアスター教研究は、この点に関して無批判的だった。例えば、I. Gershevitch, “Zoroaster’s own Contribution,” *JNES*, XXIII, 1964参照。執筆状況

を考慮すれば、「パフラヴィー語文献は、サーサーン王朝時代のゾロアスター教国家教会の教義を、そのまま反映しているのか？ それとも、9-10世紀に偶々生き残って執筆活動に熱心だった神官団の教義を反映しているのか？」という問いが提出されて当然である。また、ズルヴァーン主義の問題も、この点を考慮しなくてはならない。

- 8 例えば、『デーナカルド』第8巻で、祭祀関係の『アヴェスター』第7巻として紹介されている *Vištāsp Yašt* は、実際には *Vidēvdād* の焼き直しに過ぎないことが判明している。J. Kellens, "Avesta," *Encyclopaedia Iranica*, Vol. III, 36-37.
- 9 現段階で最も纏まった『デーナカルド』の内容紹介としては、Ph. Gignoux, "Dēnkard," *Encyclopaedia Iranica*, Vol. VII, 284-289参照。
- 10 Madan 版のテキストから、Bombay 版写本の folio 番号を調べるには、Madan [1911: pp. x-xx]、及び Dresden [1966: 21-45] 参照。
- 11 氏の蔵書は、東京大学東洋文化研究所に寄贈された。蔵書目録としては、永ノ尾信悟・青木健（編）『東洋学研究情報センター叢刊3 東京大学東洋文化研究所蔵 伊藤義教文庫目録』、東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター、2004を参照。

第7 ページ転写

(6) 8-om pursišn⁽¹⁾

pursīd āhōg⁽²⁾ ahlomōy⁽³⁾ kū ka <Weh Dēn abardar> andarz⁽⁴⁾ awināhīh

1 Madan 版第7 ページの第17行目から。

2 Menasce[1973: 32]は、āhōg を *autre* と訳しているが、不可。この語は、ahlomōy = 「異教徒」の語の前にあるので、近世ペルシア語のāhūと同じく、「不埒な、誤った」と解すべき。

3 Menasce[1973: 32]は、*l'hérétique* と訳しているが、疑問である。ゾロアスター教の教会用語では、「異教徒・異端者」を指す単語として、①ahlomōy, ②judristag, ③zandik, ④kēšdār の4つがある。①は、「義に反する者」の意で、完全な異教徒を指す。②は、jud+ristagで、「道を失った者」から転じて「ゾロアスター教内部の異端分派」を指す。③は、「聖典注釈『ザンド』を(恣意的に)解釈する者」から転じて、主にマーニー教徒を指す。(この単語は、イスラーム時代に入ってからでも、イラン民族主義的な思想運動やシーア派に対して多用され、イスラーム思想上の重要な概念として生き残った。イスラーム神学の確立と共に消滅。Melhem Chokr, *Zandaga et zindigs en Islam au second siecle de l'hegire*, Damas, 1993参照) ④は、kēš+dārで、「意見を持つ者」から転じて、「邪教(この場合は、主にキリスト教)の意見を持つ者」の意を表す。このうち、④については、伊藤義教[2001: 479-92]「ケーシュダーラン句の解釈について—『デーニカルド』第3巻から—」参照。因みに、マーニー教の中世ペルシア語教会用語で「異教徒」を指す一般的な単語は、duškirdagで、原義は「悪なる行いの者」。M. Boyce, *A Word-list of Manichaean Middle Persian and Parthian with a Reverse Index*, Téhéran and Liège, 1977参照。

ここでは、①を使っているのだから、問うた相手は完全な異教徒であると推測される。おそらく、『デーニカルド』執筆当時は明示を憚られる、イスラーム教徒だったと考えられる。

4 語源は、<古代イラン語*ham-dararza- = 「共に見る」。或いは、語形上からは、<Av. handarəza- = 「枷」の別解も可能。これを継承したパフラヴィー語の原型は handarz で、「教訓・道徳」の意である。後期になるにつれて、語頭の h 音が脱落し、andarz の形が一般的になった。

šmāh xwadāyih ud dādwarīh ud kārezār ī 'abāg

<Anērān ud was ke ēn>⁽⁵⁾ +šōn-iz

was kār ī awināhīh kardan nē šāyistan nē abāg

awin-

āhīh <ō> hambasān čim kunēd

passox

<Xwadāyih ud> dādwarīh ud kārezār ī abāg Anē-

rān ud abārig was ī

第7 ページ翻訳

(6) 第8問

不埒な異教徒⁽⁶⁾が問うて曰く「ウェフ・デーン⁽⁷⁾の最高の訓戒⁽⁸⁾は

5 passox 中のパラレル・パッセージからの再構成。

6 原語は *ahlomōy* で、もともとの伊藤氏の訳語は「破義者」だった。注3参照。

7 「ゾロアスター教」の名称は他称。本人たちは、パフラヴィー語で、*Weh Dēn* = 「善なる教え」(>NP. *Beh Dīn*)、或いは *Mazdēsna* = 「マズダー祭儀教」(<Av. *Māzda+yasna*-) と自称している。

8 サーサーン王朝時代から西暦11世紀までのイランでは、インド・イラン的な伝統に基づく教訓文学 (*Andarz*, *Pand*, *Adab*, *Akhlāq*) が全盛を極めた。ここでの異教徒の発言も、その文化史的な文脈上で理解される。なお、11世紀後半にイスラーム神学者アブー・ハーミド・ガザーリー (1058-1111) が出現して以降、イランではこの種の教訓文学が急速に廃れ、代わってイスラーム道徳を説くイスラーム倫理学が主流となった。伊藤義教、『『先師金言要集』とアンダルズ文献研究序説(上)(下)』、『オリエント』7/1, 1964, 1-17, 7/2, 1964, 15-31参照。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その1

罪を造らぬことであるのに、
あなた方は王権とか司直とか非イラン人やこの種の多くのもの
との闘争といった
多くの行為を、それらは罪を造らぬということと矛盾しないで
はすることが
できないのに、なぜ、行うのですか」。

答弁

王権とか司直とか非イラン人やその他、この種の多くの

第8 ページ転写

+kē ēn <šōn> az Dēn Mazdēsñ dastwarīh
andar kār dārēm
meh-dādestānih⁽⁹⁾ <ast> 'Weh Dēn abardar andarz
ud sāmān ī
meh-dādestānih <rawāg> sūdih ud pādīrān zyānih
ke-š andar
gumēzagīh <abāz dārēd zyānih> rawāgīh-ī ud
pādīrān sūdih čiyōn amaragānīg

9 Menasce[1973: 32]はclémenceと訳し、伊藤氏も「大赦」ととっている。しかし、この語の原義はmeh+dādestānihで、直訳すれば「大いなる判決性」である。ここに「免罪」の語義を認めるのは、少し後のawināh čiyōn awināhīh ī dādār=「創造主の罪を造らぬ性質のごとくに、罪を造らぬ」のパッセージとの整合性が唯一の根拠である。語釈からは、この語義は出てこない。

sūdih <abāz dārēd> Dēn xīndag⁽¹⁰⁾ zyānih
ud pādīrān sūdih-iz rawāgih ī
ān amaragānīg sūd andar gēhān rawāgih ud
winnārišn ī dām paywan-
dišn ō frašagird ī pōryōtkēšīg⁽¹¹⁾ weh-dād⁽¹²⁾ u-š
arm-
ēštih arawāgih ī dām wisānišn ī az fraša-
gird ī ahlomō-

10 Menasce[1973: 32]は、Dēn hēnik=l'armée de la Dēnととっているが、不可。直後の「利益の退転」と並んで抑止されるべき対象であるから、「デーンの軍勢」ではあり得ない。Dēn xīndagと読んで、「デーンの災難」と解すべき。

11 pōryōtkēš の語釈には、異論があり得る。この語の原義は、アヴェスター語の pa-oiriīō.tkaēša=「初めて（教組ゾロアスターの）啓示に接した直弟子」であり、サーサーン王朝時代に入るとそこから転義して「学識者一般」を意味するようになった。「先師」との訳語はその区別を曖昧にしているが、ahlomōy とパラレルに用いられている点から、「サーサーン王朝時代のゾロアスター教高位聖職者」と解するべき。この語釈の転換については、Jehangir C. Tavadia, *Diemittelpersische Sprache und Literatur der Zarathustrier*, Leipzig, 1956, 65参照。

12 エザーフェ ZY=ī の扱いは、パフラヴィー語文献を翻訳する際の難点の一つである。この語は、Old Iranian の ya- を起源とし、ガーサー語の段階では関係詞として使用されていたものの、後期アヴェスター語の段階では名詞+名詞/形容詞を繋ぐコネクターに変質しつつある。近世ペルシア語段階になれば完全に不変化辞として定着するのだが、パフラヴィー語段階は過渡期で、関係詞としてもコネクターとしても使われている。詳しくは、M. Boyce, "The use of relative particles in Western Middle Iranian," *Indo-Iranica: Mélanges G.Morgenstierne*, Wiesbaden, 1964, 28-47参照。ここでは、paywandišn ō frašagird=「フラシヨギルドへの結びつき」と pōryōtkēšīg weh-dād=「先師の善法」をエザーフェで連結していると解釈することも可能だが、weh-dād の後に ast を補って、「フラシヨギルドへの結びつき」-「それは、先師の善法である」との解釈に落ち着いた。なお、伊藤氏のパフラヴィー語解釈では、エザーフェを極力アヴェスター語的な関係詞として理解する傾向が顕著である。

γih wattar dād ud kardār ī meh-dādestānīg
kār pad ēwāzīg
rawāg zyānīh⁽¹³⁾ pādīrān sūdīh andar-iš owōn
bawēd čiyōn andar
wāyišn ī tagīg wād ud pad amaragānīg srāyi-
šn <ud> bōzišn az gand
ī-š andar wāyišn widār ō hambasān⁽¹⁴⁾ rasēnēd
bēšidār
ast kē ēdōn awināh čiyōn awināhīh ī dādār <i> pad
hām
dahišn sūd ud meh-dādestānīh dād ī dām ō kōšišn
ī
abāg druz ī ka-iz šān andar kōšān dard ud bēš
ud marg
wasān druwandān ud az ahlomōyān xōg ēn-iz
2 ①ēk pad an ī
kam zyān rawāgīh <ud> ān ī keh sūd pādīrānīh ī
andar meh
sūd [ud] kār ō anāsān 《anāgāhān》 abārōn nimū-
dārīh[ā]
[ud] ān ī meh sūd kār akārēnīd<an> ud ②ēk pad ān ī

13 ここは、接続詞 ud が必要な箇所。写本レベルでは、この接続詞 ud は省略されることが多いので、今後はいちいち注記しない。

14 Menasce[1973: 32]では、hanbasān と転写しているが、不可。パフラヴィー文字表記上は hnbs'n だが、マーニー教中世ペルシア語の表記 'mbs'n を優先。語義は、「敵」で可。

meh sūd

+rawāgīh ud ān ī meh zyān pādirānih ī andar

meh zyāngar

andar anāgāhān wiyābāngarīh [ud] ān ī meh

zyān kār rawāgīh

dawīdan ˙˙ (止)

第8 ページ翻訳

ものとの闘争はマズダー教の指導に従って

我らは発動しているのである。

大赦（免責、免罪）は善教の最高の訓戒

にして大赦の

領域（内包）は利益の進展と災厄の退転で

これらは混合界⁽¹⁵⁾

において災厄の進展と利益の退転を一つでも

抑止するものであること、例えば一般の

利益が Dēn を悩ます災厄

や利益の退転を抑止することのごときである。世界における
一般的利益の進展、創造物⁽¹⁶⁾の進展と確立、フラシヨギルド⁽¹⁷⁾

15 サーサーン王朝時代のゾロアスター教の教義では、現在の世界は、光と闇が混合し、宇宙的規模での闘争を繰り広げている場である。従って、現世のことを、gumēzagīh/gumēzišn = 「混合の世界」と表現する。

16 原語は dām で、伊藤氏のもともとの訳語は「庶類」。

17 原語は fraš(a)gird (<Av.frašō.kərəti) で、原義は「悪との闘争に勝ち残ること」。ここから転義として、「時間の終末に於ける（善なる神による）復興」の意味になった。なお、伊藤氏のもともとの訳語は「建て直し」だが、ゾロアスター教の宗教的ニュアンスが出ないので訂正した。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーナカルド』第3巻訳注・その1

への結び付き— それは先師の善法であり、また
創造物の頹敗と無進展、フラシヨギルドからの離脱
— それは破義の
極悪法である。而して大赦的な
活動を一人で行う者は
自分が災厄の進展と利益の退転の中に
いること、宛も強風
の吹く中にいて一般の人々を、自分がその中にいる
臭気⁽¹⁸⁾から守りそして救うために
(風の吹く通路(風向き)を逆に(自分の方に)やって来させる者のようなもの
である。援苦者も
創造主の罪を造らぬ性質のごとくに 罪を造らぬものである
こともある、して主は全
創造物の利益と大赦のためにドルズ⁽¹⁹⁾との斗いのために創造物を
創造し給うたが、そのドルズどもも斗いの裡で苦痛と痛苦
と死など
多くの不義なるものを蒙ることがある。また異教徒どもの性質の
中にこの二つがある：①一つは
大利ある活動をすると 僅かな災厄も進展し且つ

18 ゾロアスター教は、別名を「香りの宗教」と称されるほど、芳香と悪臭に拘った。パフラヴィー語文献中で二元論を説明する際も、「善と悪の対立」や「光と闇の対立」と並んで、「芳香と悪臭の対立」が言及される。

19 Av. druj, MP. druz. 悪魔の一般的名称。但し、ゾロアスター教の場合、天使のヒエラルキーは秩序だって説明されているものの、悪魔のヒエラルキーには不明な部分が多い。Stausberg[2002: 135ff.] 参照。

僅かな利益も退転するということを
不安な《蒙昧な》ものどもに 誤って示すこと
によって
大利ある活動を無力にしてしまうこと、また②一つは
大厄ある活動をする
大利が進展し且つ大厄が退転するということを
蒙昧なものどもの間で^{いつ}詐(いつ)わることによって 大厄の
活動の進展を
呼号する (lit. ほざく) こと、である。

第9 ページ転写

(7) 9-om pursišn

pursīd āhōg⁽²⁰⁾ ahlomōy kū ka mānsar⁽²¹⁾ ast ī pad

gōwišn ī ?⁽²²⁾ <ud> ? ast ī pad gōwišn ī Frašōstar

<ud> Ĵāmāsp ud 'ast ī

pad gōwišn ī +Hwōw ud +Sēn [··] ud ast ī pad gōwišn

ī ān ī

awēšān pēš az Zarduxšt ud pas-iz az +Sēn paydāg

hamāg

20 注2 参照。

21 転写は、mānsr の可能性も。語源は <Av. mā̄ra> で、インドのマントラに相当。

22 この? と次の? には、文脈上は、古代ゾロアスター教の権威ある人名が入る筈だが、解読不能。

Ohrmazd ō Zarduxšt guft amāh pad ān ī-mān

abar ān ī

Ohrmazd ō Zarduxšt guft[an] ēwāz Gāhānīg [ud]

abārīg Zardu-

xšt u-š hāwištān az gēhān brēhēnīd⁽²³⁾ saxwan-iz

az handr-

āyīdan pad waštāgih hangārd 𐬨𐬀𐬎𐬎𐬎⁽²⁴⁾

passox

hād abārīg mānsar ī ʒud [ī] az Gāhān agar ōh az

Gāhān <ud> az yaθā-ahū[k]-vairyō[k] brēhēnišnīh

ham mānsar ī ʒud [ī]

az abar gugāy ān +gugāyih abāg xwad Ohrmazd

pad wisp-āg-

āhīh nēnōg [ud] brēhēnīd[an] ud nē az mar-

dōm dānišn ī ō-iz

bahrān bahr ī aziš nē rasād būdan pad was

23 Menasce[1973: 33] は brihēnit としているが、不可。brēhēnīd で、原義は「創造する」ととり、転義で「(ゾロアスターと弟子たちが) 捏造した」と解するべき。

24 Menasce[1973: 33] のこの部分の訳は混乱している。saxwan 以下を, comme des mots qui sont désordonnés et corrompus と解しているが、これは az の直後の単語を avērast ととった為。前置詞を考慮して handrāyīdan ととり、「戯論」と解するべき。この単語と次の waštāgih に、それぞれ az と pad の異なった前置詞を配していることを説明する上では、こちらに理がある。

ēw<ā>z

gōwišn ī mānsar nē hamāg Ohrmazd ō Zarduxšt

pad ān

ēwāz guft bē gōwišn ī jud jud kē padiš ēwāz

+guft +ud

paydāg Ohrmazd kē ān <ī> ēn mānsar čiyōn frāz

gōwišn ī

Zarduxšt ud any wehān <ud> wattarān-iz ān-iz

ī dēwān tā-iz

Ganāg Mēnōg az Ohrmazd guft andar paydāg

ān gōwišn ān-iz ī Ganāg-

Mēnōg ud dēwān mānsar ud dād ī jud-dēw

ham-dēw guft

bawēh ud mānsar Ohrmazd ō Zarduxšt pad was

ēwāz hamāg

第 9 ページ 翻訳

(7) 第 9 問

不埒な異教徒が問うて曰く「マンストラは或ものは

？と？とのことばに、或ものはフラシャオシュトラ⁽²⁵⁾とジャーマー

25 Av. Frašaoštra-, MP. Frašōstar, NP. Frashūshhtar. ゴロアスターの最初期の教友の一人。フヴォーグヴァ家 (Av. Hvō.gva-, MP. Hwōw, NP. Hvogva) の出身で、弟のジャーマースパと共にカウィ・ウィーシュタースパ上の宰相を務めた。娘のフヴォーイー (Av. Hwōwi, MP. Hwōw, NP. Hvūy) (Yasna 31参照) はゴロアス

SPA⁽²⁶⁾とのことばに、また或ものは

Hvogva⁽²⁷⁾と Saēna⁽²⁸⁾とのことばに、また或ものはゾロアスター⁽²⁹⁾

ターと結婚し、フシーダル、フシーダル・マーフ、ソーシュヤンス（以上、MP形）の3子を出産することになっている（『ブンダヒシュン』第32章参照。不可解なのは、フヴォーイーに対して棄せられたゾロアスターの精子は、大地に吸収されて、遙か後代の3乙女を受胎させる点。これだと、3救世主の直接の母親はその3乙女になり、フヴォーイーは大した役割を果たしていない。これで「救世主」の母親といえるのだろうか？ 伊藤[1979: 121]参照）。ともかく、このような理由で、彼は最終審判の救世主の外祖父に当たる。語義は、「先頭の駱駝の所有者」。Oshīdarī [1999: 367]参照。

26 Av. Jāmāspa-, MP. Jāmāsp, NP. Jāmāsb. 『アヴェスター』の Fravardīn Yašt 103に登場する、ゾロアスターの最初期の教友の一人。フラジャオシュトラの弟で、共にカイ・ウィーシュタースパ王の宰相・占星術師だったとされる。ゾロアスターの三女ポルチスター（Av. Pouručistā-, MP. Porčist, NP. Pūrūchistā）と結婚し、教祖没後は教団を統率した。パフラヴィー語文献の中では、『デーンカルド』第9巻や『ザレルの回想』で言及される。後世、ペルシア文学の中では、古代イランの賢者の象徴として知られるようになった。Fravardīn Yašt 127に登場する同名異人のジャーマースパとは区別が必要。語義は、前肢が不明で、後肢が「馬」。Oshīdarī [1999: 229-30]参照。

27 Av. Hvogva-, MP. Hwōw, NP. Hvogva. フラジャオシュトラ、ジャーマースパ兄弟の先祖。詳しい事績は不明。

28 Av. Saēna-, MP. Sēn/Syēnan, NP. Sa'ina. 『アヴェスター』の Fravardīn Yašt 97に、「100人の弟子と共に地上をこちらへやって来た」と紹介されている。『デーンカルド』第7巻第7章では、「デーン成立の100年後に生まれ、デーン成立の200年後に死んだ。マズダー祭儀教の最初の100弟子信者である。」と記述されている。（この部分の翻訳については、伊藤義教[1979: 91と99]参照。）また、『デーンカルド』第9巻第23章では、カイ・ウィーシュタースパ、フラジャオシュトラやジャーマースパと並んで、ゾロアスターの最初期の教友の一人に数えられている。Oshīdarī [1999: 315-16]参照。

29 教祖の名称は、Av. Zaraθuštra-. Spītāma-, MP. Zarduxšt ī Spītāmān, NP. Zartosht-e Sfitāmān. 語義は、「スピターマ家のザラスシュトラ」の意。イランの

より先に

出た人たちと Saēna より後に出た（人たち）とのことばによるが⁽³⁰⁾、

明らかなことは いずれも

Ohrmazd が Zoroaster に語ったということである。われらは

(amāh)、

Ohrmazd が Zoroaster に Gāθā⁽³¹⁾のみを語ったということに立って

(abar)、われらにとっては (-mān) その他のものは Zoroaster と
後の弟子たちが戯論でこの世で作上げた ことば

であるということによって ('pad 'ān ī...az handrāyīdan)

伝説では、カイ・フスラウ王の隠遁後に地上に現れ、オフルマズドからの啓示を受け取る。カイ・ウィーシュタースパ王の治世にイランで布教し、77歳で殉教したといわれている。伊藤義教[1979: 10-12]参照。但し、本稿では、西欧風の名称である「ゾロアスター」を用いる。

30 サーサーン王朝時代のゾロアスター教に於いて、教祖以外に預言者と認められていた人物については、『デーナルド』第7巻第1章 (Madan: 591-599) に詳しい。この部分の日本語訳は、伊藤義教[1979: 3-19]参照。

31 Av. Gāθā, MP. Gās (後に Gāh), NP. Gāthā. 『アヴェスター』の最古の部分で、ゾロアスター本人の言葉と推定される。言語上は、残余の『アヴェスター』と明らかに違い、イラン語派の最古の形態を維持していると考えられている。内容的には全17章、音韻別に区分すれば5種類の韻文から成る。伊藤義教[1967: 417-430]参照。『アヴェスター』構成上は、「ヤスナ」全72章の中で、第28章～第34章、第43章～第51章、第53章を占める。教祖の言葉は最も霊力が高いと考えられているので、ヤスナ祭式執行の中核に据えられている。しかし、上記の章分けから明瞭なように、ガーサー自体が更に2分され、その間の第35章～第42章は、教祖没後すぐに作成された散文「7章ヤスナ」で占められている。ガーサーが『アヴェスター』の中核になっていることに不思議はないのだが、その中に「7章ヤスナ」がサンドイッチされて「コアのコア」になっている事実は、ゾロアスター教の聖典構成上、不可解な点である。Helmut Humbach, "Gathas: 1 Text," *Encyclopaedia Iranica*, Vol.10, 321-327, Oshīdari[1999: 402]参照。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その1
歪曲したものと考えている」と(32)。

答弁

さて、Gāθā以外の他のマンスラがもしこのように

Gāθāや Yaθā ahū vairiīō⁽³³⁾から作り上げられたものであるなら、

上記の論拠

とは別の同じマンスラもこのこと 即ち Ohrmazd 自身が全

知の力を似て作り上げたものということと共に人

の知識ではその何分の一にさえ

も到達しないであろう ('ne 'rasād) ということを証明するもの (gu-
gāyih) になる (būdan)。マンスラが多く

32 偶然ながら、この批判は今日のイラン学が導き出した結論と一致している。現在では、ゾロアスター自身の言葉は『アヴェスター』の中の Gāθāのみで、Yašt はゾロアスター以前のインド・イラン共通時代の神話であり、Widēwdād はメディア地方のマギの作品と考えられている。確かに、Yašt などは、Gāθāに対する前代の宗教の揺り返しとして機能しており、内容的には相互に矛盾している。

33 『アヴェスター』の「ヤスナ」27:13に該当するゾロアスター教徒の信仰告白文。全21語の冒頭の3語をとって、Av. Ahuna Vairiia, MP. Ahunwar, NP. Ahūn Va'iriyaと呼ばれる。『アヴェスター』中では、神威あるアフラ・マズダーの言葉とされ、信徒の指針として機能してきた。但し、内容解釈は不確定で、全21語が『アヴェスター』の21巻を象徴しているとは分らない。このアフナ・ワルヤに、アシュム・ウォフー Ašəm Vohū (ヤスナ27:14)、イェンヘー・ハーターム Yeñhē Hātām (ヤスナ51:22)を加えた3つを、「ゾロアスター教の3大祈禱文」と称する。S. Insler, "The Ahuna Vairya Prayer," *Acta Iranica 4: Monumentum H.S.Nyberg 1*, 1975, 409-21, Oshidari[199: 145-46]参照。

の語を述べている点においては、その悉く^{ことごと}を Ohrmard が
Zoroaster に そのような語で
述べたのではなくて それ (Ohr.が Z.に語った) の乗っかって (padiš)
語を述べたそれぞれのもの共の発言であって
明らかに Ohrmard がこのマンスラのそれ (発語者) で在ること
宛も Zoroaster や
その他の善人達のみか極悪人共の独自発言、さらには Ganāg Menōg に
到るまでの
諸 dēw のそれさえ Ohrmazd の言ったことに由来していることが
その中に明らかであるが如きである。かの発言 — Ganāg Mēnōg
や諸 dēw のマンスラとか、当の dēw (でさえ) も
言っていることになる「除魔」
法⁽³⁴⁾、さらには多くのことばで Ohrmazd が Zoroaster に
(授けた) マンスラもみな

第10ページ転写

Ohrmazd ō Zarduxšt xwastūgih ud ast ī nē
hambasān čiyōn
gāhān ke šmāh-iz pad hamāg Ohrmard ō Zarduxšt
ast ī
pad ēwāz ī Zarduxšt ud ast ī pad ēwāz ī Amahra-

34 Av. Widēwdād, MP. dād ī jud-'dēw, NP. Vendidād. 原義は、「悪魔を払う法」。『アヴェスター』第19巻「ウィーデーウダード」を指す。『アヴェスター』の中で、唯一完全形で現存する巻。全21章で、主に清浄儀礼の細則を述べる。成立はアルシャク王朝時代と考えられ、アヴェスター語の文法的崩壊が進んでいる。J. Kellens, “Avesta,” *Encyclopaedia Iranica*, Vol.3, 35-44, 及び Oshīdari[1999: 471]参照。

spandān

ast ī pad ēwāz ī Gōš-ruvān⁽³⁵⁾ ast ī <pad> ēwāz ī

abārīg yazadān

guft ēstēd ō hamāg <ī> Ohrmazd ō Zarduxšt guft

nē

hambasān ∴ ud az xōg ī ahlomōy waranīg nigerīdā-

rīh ī abar xwēš

akōmanīg nigerīdārīh ī abar āhōgān⁽³⁶⁾ gōwišn ∴ (止)

(8) 10-om pursišn

pursīd ahlomōy kū ēzm⁽³⁷⁾ ī tarr abar [pad] ātaxš sōx-

tan

čim wināh gōwēd xwad nē bawēd ∴

passox

hād amāh +hēsmag(or hēzmag) ī tarr +abar ātaxš

35 Menasce[1973: 33] は、Gōšurun と解している。ここは、Gōš-ruvān (<Av. Gōšuruuān) で、原義「牛の魂」とするべき。

36 Menasce[1973: 33] は、ahūpān と解している。語釈は示していないが、ahū+pān ととれば、「誤った者」の「守護者」の意で、大悪魔（の単数形）を指すことになる。しかし、文脈上は「極悪人共～諸 dēw（の発言）」（第9ページ翻訳参照）として、複数形が想定される。ここは、āhōgān として、āhōg の複数形ととるべき。

37 イデオグラムで CYBA とあるだけなので、語義は「燃料用の薪」だが、対応するパフラヴィー語の発音は難しい。Menasce[1973: 34] は、NP. hīzom = 薪を考慮して、ēsmak としている。

+burdan [ud] wināh 《
adādihā ranj ī pad huškkarih》 ān ī +hēsmag ō
ātaxš
madan +ōftišn-iz ī ātaxš az ān tarrih rāy
gōwēm ˙˙ ud az
hōg ī ahlomōyān +abēsūd⁽³⁸⁾ <wa>hāg ōšmarišnīh-iz ˙˙ (止)

(9) 11-om pursišn

pursid ahlomōy kū may ī apaymān⁽³⁹⁾ wināh čim
gōwēd
ud may paymānīg-iz xw<ā>rdan nē šāyēd

passox

hād amāh may <ī> apaymān xwārdan wināk gō-
wēm <ud may ī paymānīg xwārdan> šāyēd
čiyōn Dēn gōwēd kū ān ī paryōxt⁽⁴⁰⁾ hūr xwarēd
ān ī

38 この emend は、Menasce[1973: 34] を踏襲した。abē-sūd で、「価値」+「なし」。

39 パフラヴィー語文法上は、「無音声が母音に挟まれた場合は有声音化する」筈である。しかし、語頭の a が否定辞の場合は、続く無声音は保持される。従って、apaymān は、abaymān とはならない。

40 Menasce[1973: 34] は、partoxt と転写して、tempère と訳しているが、疑問である。少なくとも、転写は paryōxt とあるべき。意味は conquered か？

第10ページ翻訳

Ohrmazd が Zoroaster に (授けた) 信条文であって矛盾
のないものであることは 宛も
あなた方も Ohrmazd がすべて Zoroaster に (語ったもの)
として Gāθāが、あるものは
Zoroaster のことばで、またあるものはアマフラスバンドたち⁽⁴¹⁾の
ことばで、(また)
あるものは Gōušurvān のことばで、(また) あるものはその
他の神々のことばで
述べられていて、而も Ohrmazd が Zoroaster に 述べた
すべてのものと矛盾して
いないようなものである。そして異教徒の (もつ) 自身への
貧婪 (ワラン) 的な眷顧^{けんこ}の性質から
不埒な者共の発言への aka manah (Akōman) 「悪思」的
な眷顧が (生じるのである)。

(8) 第10問

異教徒が問うて曰く「湿った薪材を火で燃
やすことは
なぜ罪だとあなた方は言うのですか。(こんなこと) はそれ自体 (お

41 Av. Aməša- Spənta-, MP. Amahraspandān. ゾロアスター教では、アフラ・マズダーに次ぐ最高位の6大天使を指す。伊藤氏のももとの訳語は「不死饑益諸尊」で、「aməša- (不死なる) +spənta- (利益者)」という語義の上からは全く正当である。しかし、宗教的には仏教風のニュアンスを帯びてしまうので、「アマフラスバンドたち」に訂正した。

こり得) ない ことです。」と。

答弁

さて我々は、湿った薪材を火にくべることは、その薪材

が火に入ることは その湿気のために火が

消えることとなるので、罪《乾燥させることへの無法な労

作》と言うのである。そして異教徒共の

性質から 無益な価値とみなされるべきでもあるのである」⁽⁴²⁾。

(9) 第11問

異教徒が問うて曰く「paymān (節度) なき (飲) 酒を罪となぜ

(Dēn) は言い

また節度ある酒を飲むのは (なぜ) 許されないのですか」と⁽⁴³⁾。

答弁

42 現代イランのゾロアスター教徒に訊ねると、「湿気の多い木材の使用を避けるのは、煙が出るのを防ぐため」と云う答えが一般的である。確かに、ヤズド、ケルマーンの拝火神殿では、好んでアンズの乾燥材を利用している。教義に照らした場合、「煙は悪魔の創造物」と規定されているので、この解答の方が合理的に思える。

43 飲酒を禁じるのは、イスラームの戒律であって、ゾロアスター教では適度の飲酒は推奨行為である。この発言からも、ahlomōyの実体がイスラーム教徒だと推測される。

さて、われらは節度なき酒を飲むことを罪と言

い また節度ある酒を飲むことは許されること

宛も Dēn が「控え目の酒は飲めよ、控え目

第11ページ転写

paryōxt sūr šāyēd +xward<an> u-š <ni> māyēnid ān ī

Gāhān pad

asrāyišnih astārēnid<an> ud az xōg ī ahlomōyān +duš

kirrōgihā

wāzag ī kasān wardēnidan +ud +āhōg [ud] abar

+xwāstan ∴ (止)⁽⁴⁴⁾

第11ページ翻訳

な食事を摂ってよい」と言っているが如くである。そしてそのこと

は Gāōā が喧伝

さるべからざるものとして告発していることが示しているのである⁽⁴⁵⁾。そして

異教徒共の性質から悪だくみして

44 Madan 版第11ページ第3行目まで。

45 この u-š...astārēnidan に対応する部分の文意は、頗る不確実。直訳すると、u-š nimāyēnd = 「そしてそのことは、以下のことを示している」で、ここまでは問題ない。次を、ān ī Gāhān padasrāyišnih = 「諸ガーサーを朗唱できなくなること性」で切り、astārēnidan = 「罪を犯してしまう (性)」と訳せば、「過度の飲酒の弊害」を列挙していると解釈できる。この場合、後続の一文は、「過度の飲酒を戒めた訓戒を、異教徒が飲酒全般を禁止したと拡大解釈した」と咎めていると理解できるだろう。伊藤氏の訳は、a+srāyišn = 「朗唱できない」を、asrāyišnih = 「喧伝さるべからざる」ととるなど、改善の余地がある。

他人のことばを変えて欠点をその上にさがし出すことが由来する。